

## あとがき

本報告書の最終まとめを行っているときに 2023 World Baseball Classic が開催され、日本チームは 7 戦全勝で 3 大会ぶりの優勝を果たした。とくに準決勝の逆転劇や決勝の手に汗握る展開は記憶に残るものであったが、優勝後のインタビューで明かされた、監督と選手の信頼関係も印象深かった。栗山監督は、つねづね「選手を信じる」と明言し、準決勝のチャンスシーンでは、三連続三振に三邪飛とその日ずっと振るわなかった村上選手に対しても「ムネに任せた、思い切って行ってこい」と背中を押し、「バントも考えていた」という本人を奮い立たせた。無論、打てない可能性もあったに違いないが、城石コーチは、栗山監督について、「負けて選手個人を責めたことは一度もない。代打で打てなかったり、投手が打たれたりしても、『場面に適した選手を出さなかった』『自分が選択を間違った』と言うんです」と伝える。決勝戦終盤でのダルビッシュ・大谷両選手の登板についても、投げる・投げないは本人たちに委ねている。登板間隔やメジャーリーグ開幕との関係もあったとはいえ、ここぞという場面でも指図はしていない。もちろん、メディアを通して伝わってくる情報の偏りについては考慮しなければならない部分があるにしても、こうした監督像や監督選手関係と「星野君の二塁打」との懸隔から考えさせられることは少なくない。

奇しくも同時期、3 月末になって 2024 年度から使われる新しい道徳教科書に関する情報が飛び込んできた。今回の検定を経て、「星野君の二塁打」を掲載する教科書はなくなるという。出版社が道徳教科書作りから撤退するケースも含まれているようなので、教材自体の評価だけが理由ではないが、結果として、教科書教材としての「星野君の二塁打」は唐突な幕切れを迎えることとなった。かねてより、時代錯誤的なセリフを削除されたり強権的を受け取られかねない言葉や措置はマイルドなものに変えられたりして延命が図られてきたが、とうとう最期のときを迎えたということだろうか。延命路線の行き着く先は「そうまでしてこのおはなしを掲載しつづける意味はあるのか」という疑問だったに違いないので、終わりはずっと以前から準備されていたということだろう。

いまとなれば、原作と違って一面的に「監督の命令に服従するか否か」を問うものであるかのように構成され、またそのように受け取られてきた教材としての「星野君の二塁打」の不幸を思わずにはいられないが、しかし、そうならざるを得ない必然性もまたあったはずだから、むしろ、この日をもっとはやく迎えることにならなかった理由のほうを問題にすべきなのかもしれない。

「星野君の二塁打」の掲載は終焉を迎えても、「星野君の二塁打」的なるものに終わりはない。「星野君の二塁打」とは何であったのかという問いは、その歴史の解明とあわせて、なお課題であり続けるであろう。

(柳澤有吾 記)